

患者さま手作り作品



# さくら

本庄児玉病院  
広報誌第30号

## contents

-  七夕、作業療法、納涼祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 1
-  作業療法士室だより・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 2
-  精神科コラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 3, P. 4, P. 5, P. 6
-  外来診療担当医、外来患者延数・入院患者数、栄養課「9月の行事食」・・・・別冊
-  新型コロナウイルス感染症対策の取組み・・・・・・・・・・別冊

# 七夕

今年は、新型コロナウイルスの感染防止の為、七夕行事は中止となりましたが、患者さま手作りの七夕飾りをロビーに飾り短冊に願いを書きました。

新型コロナウイルスの終息を願う短冊が多く見られました。そんな中でも子供たちの願い事は可愛らしく、微笑ましいものが多くて癒されました。



## 作業療法

### ぬり絵

色使いがお上手。



### キャラバン外出

ドライブ(車中のみ)をしてひまわり畑など景色を楽しみました。途中でカモに出会いましたよ〜



### ロールピクチャー

季節に合わせた作品を作っています。

### ボーリングみなさん真剣!!

夢中になって楽しんでいらっしやいました。

**花壇**  
患者さまが育てた花や野菜がすくすく育ちましたよ〜

### 野菜作り!!

野菜を作っていた方が多く、昔を思い出しながら、みなさん作業されていました。

### 立派な

ナスやキュウリ・シソ・ピーマンが出来ましたよ〜



良い香りがする〜

シソの葉を鼻に付けて香りを楽しんでいらっしやいました。

## 納涼祭

今年は、ご家族さまと一緒にお祭りを楽しむ事が出来ませんでした。スタッフが同会場を盛り上げてお祭り気分を味わってもらいました。



### お菓子掴み

好みのお菓子が引けたかな?!

たくさんの種類のお菓子を大変喜んで頂きました。



「体にストレッチが必要な理由」について、雑誌『Tarzan』NO. 765・2019年5月23日発売号に掲載されていたため、今回はそれを簡単に抜粋してご紹介したいと思います。

### ① 使わない筋肉は誰でも硬くなる

若い人ほど筋肉が柔らかく歳と共に筋肉は硬くなる、と信じている人は多い。でも筋肉は加齢で硬くなるわけではなく、使わなくてほったらかしにするから硬くなる。

また、デスクワークなどで長時間同じ姿勢を続けると、特定の筋肉に負担が集中して硬くなる。筋肉が硬くなると血液循環が悪くなり、姿勢が崩れ、結果として体の動きが乱れて運動時のケガや、日常での転倒を招きやすい。

### ② 柔らかくなるメカニズムが筋肉にはある

硬い筋肉を柔らかくするのがストレッチ。ではどうやって筋肉は柔らかくなるのか？

「筋肉は伸縮自在のゴムのようなもの」と思われがちだが、それは大きな誤解で、実は筋肉は縮むだけで伸びはしない。筋原線維の中にサルコメアと呼ばれるものがあり、ストレッチをすると「ロープを足したようにサルコメアの数が追加され、筋原線維が長くなる」のです。筋肉の両端はどちらも骨に付くので、実は長さは変わらないが、筋原線維が長くなると柔軟性が上がり、関節可動域も広がる。個人差もあるが、ストレッチを3か月以上続けると変化が実感でき、また、ストレッチを1セットではなく、2～3セット行くと、後半ほど柔軟性が上がる。

### ③ ストレッチで動脈硬化の予防効果がある。

ストレッチを続けると柔軟性が高まり、快適に動ける。筋肉の緊張がオフになるから、肩や腰も楽になり、筋トレを組み合わせることで姿勢もリセットされる。また、以下の要因により動脈硬化の予防効果や血糖値を下げる効果がある。(動脈硬化とは動脈が硬く狭くなり、血液が詰まり易い状態で、心臓病や脳卒中の元凶)

#### a. 血圧を下げる作用

筋肉が硬いと血管が圧迫されて血圧が上がりやすい。ストレッチで筋肉が柔らかくなると、血管が広がって血圧が下がり、動脈硬化のリスクが下がる。

#### b. 肥満予防

股関節など下半身の柔軟性が上がると、歩幅が広がり、日常生活での活動量がアップし、体脂肪が燃えやすく動脈硬化の危険因子である肥満が避けられる。

#### c. 血糖値を下げる効果

詳細は不明だが、恐らく筋肉を伸び縮みさせると、より多くの血糖の取り込みが促されるのだと考察する。

### ④ 動的ストレッチで血流アップ。関節も健康に！

ストレッチには大きく分けて2種類ある。1つは、筋肉を静かに伸ばす静的ストレッチ。もっともポピュラーでほとんどの場合ストレッチ＝静的ストレッチ。もう1つは動的ストレッチと呼ばれ、ラジオ体操のようにダイナミックに筋肉を動かすストレッチの事。

動的ストレッチでは、筋肉を動かすうちに血液循環が良くなり、体温が上がる。また、関節の滑りを良くする「滑液」の分泌も促すため、運動前のウォーミングアップには最適。更に、軟骨に適度な圧力変化が及び、血液循環が改善。新陳代謝が促進されて軟骨の状態が良くなる。これで軟骨の劣化による膝や股関節の痛みを防ぐことが出来る。

以上、今回は雑誌の記事から抜粋してご紹介してみました。ストレッチは「何となく健康に良いもの」とは思っている、実際どんな効果があるのか、漠然としていた方もいらしたのではないのでしょうか。コロナ禍で外出や運動の機会が少なくなっていると思います。家の中でもできるストレッチ運動を通じて、健康に留意していきたいものですね。

# 精神科コラム

## 「ヒトの性行動(後篇)」

### はじめに

今回は、「ヒトの性行動(前篇)」(広報誌第二十六号)及び前回の「ヒトの性行動(中篇)」(広報誌第二十九号)の続編であり、賛否あつたと思われる性行動篇の最終編である。

前篇では、「ヒトの性行動」について、進化学や行動生態学的視等の視点から、主に男女の性について論じた。そして、中篇では、母数が多く関連もみられる「小児性愛」と「同性愛」について取り上げた。

今回は、小児性愛以外のパラフィリアや、人類社会の性の有り様そのものについて前篇、中篇にも触れながら考えた。

「性」について考察することの難しきや意義等については、前篇、中篇の「はじめに」にて、かなり前置きしたつもりなので省かせて頂きたいが、今回も所謂「タブー」的な事柄を多く扱うので、賛否は当然あるが(否定的意見が多いと思われる)、筆者の立場としての是非等を論じているものではなく、あくまで多様な視点の一つとしてご関心のある方にお読み頂ければ幸いである。

### 「多様なパラフィリア」

中篇の最後に触れたが、「DSM-5」のパラフィリア(性嗜好障害)に分類されるものとしては、「小児性愛障害」の他に、「窃視障害」「露出障害」「窃触障害」「性的マゾヒズム障害」「性的サディズム障害」「フェティシズム障害」「異性装障害」があり、「他の特定されるパラフィリア障害」として、わいせつ電話、死体性愛、動物性愛、排泄物性愛、洗腸性愛、尿性愛が挙げられ、他にも数多くのパラフィリアが存在する。

また、様々な文献等を調べれば、上記に挙げた以外にもパラフィリアとされるものは無数にあり、その中には生物学的異常、精神医学的異常の両方に該当しうるもの、どちらかだけに該当するもの、そのどちらにも該当しないが「法的(犯罪となりうる)もしくは「倫理的」に容認されないもの等

がある。

例えば、性対象として「人妻」に強く性的興奮するものがある。これは、少なくとも倫理的には「異常」とされようが、本来完全な一夫一妻とはいえない人類(前篇参照)としては、生物学的に必ずしも異常とは考えられず、精神医学においても「パラフィリア」に分類されていない。

### 「性対象」の異常と「性目標」の異常

パラフィリアとされるものは、「性対象」の異常と、「性目標」の異常とに分類される。

「性対象」の異常は、「本来(何を)もって「本来」とするかも検討すべきだが)」「性的興奮の対象となるような異性や性器等以外の対象に対して性的に強く興奮するものであり、上記パラフィリアとしては、小児性愛障害、フェティシズム障害、死体性愛、動物性愛、排泄物性愛、尿性愛が該当する。

「性目標」の異常は、「本来」の性交以外の方法に強く性的興奮するもので、上記パラフィリアとしては、窃視障害、露出障害、窃触障害、性的マゾヒズム障害、性的サディズム障害、異性装障害、わいせつ電話、洗腸性愛が該当する。

### 「パラフィリアに対する進化生物学的視点」

進化生物学的視点では、「繁殖に結びつかない対象」を性対象とすることは「異常」であり、繁殖に直接的に結びつかない性的手段や方法も「異常」と考えられる。

乳幼児を「性対象」にすることは、生物学的にも、精神的にも「異常」とみなせるが、「同性愛」については、生物学的には「異常」であつても、精神医学的には、かつては「異常」とされ、現在は「異常」とされない。

それは、賛否は別として、個々の「実存」や司法にも関わる重要な精神医学的診断が、社会の価値観の変化に多分に影響されるからであるし、今後も変化していくことを意味する。

極端なことを言えば、今後の社会の価値観の変化次第では、「小児性愛」も精神医学上の異常から外れる可能性もある。

その曖昧さや不確実性を是正しうるものは、ヒト、霊長類、他の生物種の進化や行動生態から普遍的なものを考察することと考えるが、それが進化精神医学の目指すところである。

### 「性目標の異常としてのパラフィリア」

前回は、生物学的意味での「性対象」の異常として母数の多い「小児性愛」と「同性愛」を取り上げたが、今回は、「性目標」の異常として母数の多い「性的マゾヒズム」「性的サディズム」を主として取り上げることとする。

簡略化すれば、前者の前提となる「性的マゾヒズム」は、心理的・身体的苦痛を受けること(被虐に性的に興奮し、後者の前提となる「性的サディズム」は、心理的・身体的苦痛を与えること(加虐)に性的に興奮するものである。

相手との同意の上で、性的興奮を高める分には「障害」とはされないが、相手の同意を得ないものや、何らかの苦痛や社会的困難等に結びつく場合には「障害」とされる。

「性的マゾヒズム障害」「性的サディズム障害」共に、男性の方が女性より圧倒的に多いとされ、文献にもよるが、「性的マゾヒズム障害」の方が、「性的サディズム障害」より三倍は多いとされる。ただ、「性的マゾヒズム」と「性的サディズム」は、正反対のようで心理的には近いとされ、一方のみに偏っている場合もあるが、多くは両者の傾向を有し、移行しやすいともされる。

### 「性的サディズム・性的マゾヒズムの生物学的考察」

ここでは、ひとまず精神医学的障害としてではなく、「性的サディズム」「性的マゾヒズム」に対するいくつかの視点からの要因について考えたい。

精神分析学的には、それぞれについて、誰もが生来的に持つ「生の本能(エロス)」と「死の本能(タナトス)」から来るものと説明される。ただ、筆者は、生物学的に生得的なものとしての「死の本能(タナトス)」には否定的立場であるし、「自殺」等も生得的行動とは考えていない。

男女や雌雄の観点からは(ここでも倫理面等は別として)、生物学的に男性(雄)の方が、性行動に対して、能動的・攻撃的であり、女性(雌)の方が、受動的であるので、生来的には男性は「性的サディズム」傾向を有し、女性は「性的マゾヒズム」傾向を有するとされる。爬虫類の性交は全て「強姦的」であるし、哺乳類の雌雄の性交にしても、少なくとも外見上は大部分が「強姦的」に見える。なお、強姦も強制性交も精神医学的には定義されていないが、ここでは、あえて分類するなら広義の性的サディズムに含まれるものとして考える。

### 「攻撃、性欲、食欲は関連しやすい」

脳科学的には、新皮質をはじめ進化的に新しい脳部位からの「制御」は受けるものの、攻撃、性欲、食欲等の中枢は、間脳

や辺縁系といった脳の進化的に古くて深い部分の比較的近接した領域にあつて、本来的に結びつきやすいともされる。それには進化学的なる理由がある。

進化学的に、雄の場合、「生存」のために餌となる獲物を獲得するのにも、「繁殖」のために配偶者となる異性を獲得するのにも、さらには、それらの獲得のために外敵の侵入を防ぐ縄張りを維持するためにも、「攻撃性」が有用であり、そのような淘汰圧がかかった。逆に言えば、攻撃性が低いほど両者の獲得、すなわち生存と繁殖という適応上不利に働いたと考えられる。

また、多くの場合、雄の食料としての獲物を多く獲得する能力が、そのまま雌の獲得にもつながってきた。(例えば、人類社会的視点で言えば、夫の収入が妻の獲得に関連している。)

そして、そのことが相対的に雄の攻撃性を高め、集団間・部族間闘争における男性・雄の役割に繋がりが、さらに近現代人類社会では軍や警察等の武力に繋がったといえる。なお、それと表裏一体の負の側面として、性犯罪、暴力犯罪、受刑者等において圧倒的に男性が多い理由にもなっている。

性犯罪において、強姦して死に至らした相手の遺体の一部を口にしているケースがあると、世間は震撼し「猟奇的」な異常性犯罪と捉えるが、記録上(規制もあり全てが報道されているわけではないが)、そうしたケースが必ずしも稀とは言えず、少なくとも脳科学的には説明可能である。

また、「某女性が某男性の餌食になった」というような比喩表現もみられるので、「食」と「性」には、深層心理としても近いものがあるのかもしれない。

## 「売春」についての進化学的視点からの一考察

現代の多くの国や地域において、売春は、法的にも倫理的にも規制や禁止されている。一方で、「売春」は、「人類最古の職業」との俗説もあり、実際に古今東西の多くの国や地域で何らかの形で「事実上」の売春はみられる。

哺乳類を含めた多くの生物種において、多くの食料等の資源を獲得する能力が高かったり、食料を確保するための縄張り維持能力に優れた雄個体、つまりは多くの雌個体を養えたり、あるいは雌個体に多く食料を分け与えられる雄個体が「性選択」されている。

農耕・牧畜以後、食料に置換されたものが貨幣だとすれば、貨幣の受け渡しによって雌雄が交渉することは、群れのボスや上位の雄サルほど、食料等と引き換えに雌との繁殖機会

を多く持っていることに似ている面がある。無論売春を是とするものではないが、売春が人類最古の職業というよりは、雌雄の生存繁殖の有り様の一つが起源となつていっているのではなからうか。

また、前篇でも触れたように、父系血縁的集団内の上位のチンパンジーの雄ほど、他集団から入ってきたより多くの雌と性交渉しようとし、集団へ入つていった雌は時に集団強姦的な性交渉下において、膈内で生じる精子間競争によつて、精子の選り好みをしている面がある(そのため雄の精巢は巨大化する方向に淘汰圧がかかった)。

そして、一頭の雄は、一年に数十の雌と性交渉して子を孕ませることが可能だが、一日に数十回の性交渉することは困難である。逆に、一頭の雌は、一日に数十の雄との性交渉自体は可能だが、一年に原則一から二頭程度の子しか産めない。

この「性戦略」の違いが、前篇で示したようなヒトの男女性行動上の利害の不一致をも生むことにもなるのだが、いずれにせよ能動的な男性が陰茎の勃起と射精とをともなう性交渉による「売春」を生業として一日に連続してこなすことは一般に困難である一方で、受動的な女性においては、男性よりも連続した性交渉自体は可能である。

かつての食料などの資源と置換された金銭と引き換えに女性と性交渉を試みる男性の行動は、倫理的・道徳的に非難されやすい傾向がみられるが、男性が優れた外見や話術等を武器に、金銭等は一切介さずに女性との性交渉を繰り返すことは前者より非難されにくい傾向がみられる。しかし、後者の方が、前述した霊長類における雌雄の性行動との比較においても、見方によつては女性に対してより搾取的ともいえる。

さらに言えば、仕事には多かれ少なかれ一度きりの人生の大事な時間(いわばプライスレスな人生の一部)を切り売りするという面があるが、倫理面等では是非は別として、例えば、ある若い女性が、本来「売春」で時給一万数千円稼働ポテンシャルを放棄して、時給千円前後で他のサービス業で働いていることの方が「搾取的でない」と言い切れるだろうか。

強制的な売春は論外としても、女性自身の「性」に対する価値観も多様であり、例えば、「時給八百円の十時間のバイトを辞めて、ごく短時間で同じかそれ以上の稼ぎを得て、その分の残りの時間を、若い時にしかできないかたり、楽しめなかつたりする勉強やライブに費やしたい」と考えて自主的な売春を行っている一定数の女性の価値観は、全く許されざる非倫理的なことだと一方的に断罪できるものなのだろうか。

## 「強姦」に生得的要因はあるのか

ここでは、「強姦」が許されざる犯罪行為であることは当然との前提で、大部分の人に理解し難いと思われる「強姦」という行動が、そもそもなぜ生じうるのかについて考察を生物学的視点から試みたい。

前篇にて、遺伝的にヒトに最も近縁なチンパンジーの性行動が、乱婚的であり、父系血縁的母集団間で、雌が出入りし、入ってくる雌への雄による集団強姦的行動と、膈内の精子間競争による淘汰圧によつて、雄の精巢が巨大化した説を示した。また、他の哺乳類の性行動からも雌雄の性行動は「強姦的」な場合が多い(無論例外もあるし、鳥類の性行動なども異なる)。

人類も長らく父系血縁的母集団単位の社会で暮らしており、チンパンジーよりは乱婚性から一夫一妻よりにはなつているものの、遺伝的近縁性、前篇で触れた依然みられる性的二型、精巢の大きさ等から、少なくとも現代社会の倫理的な男女の性行動に比べれば、生得的なものとして、よりチンパンジーに近い性行動が考えられ、強姦的性行動の要因として考えられる。

「性交上、雄(男性)は、雌(女性)の「征服者」であり、生来的に、雌(女性)には強姦(司法上は「強制性交」)されたい願望があるのだ」とする俗説がある。無論暴論であるし、近年世界的にも社会的により厳しい態度が取られているが、学術的にそうした説も考慮しておくことは、精神医学的にも、司法的にも必要なものと考ええる。

文献上、一定数そうした女性がいることは確かであろうであるし、また、そうした女性がいることにより、過去の「強姦的性行動」が事件化されず、強姦的性行動が強化・反復されて、新たな女性の強姦犠牲者を生む面があるのも事実である。

「強姦的性行動」が、触法的な「強姦」(強制性交)になるかどうかは、女性側の意思、社会的価値観、警察や司法の判断によるところがあるからである。

「嫌よ嫌よも好きのうち」といった言葉があるが、それは男女のある一面を表しているのかもしれないが、少なくとも現代社会においては極めてリスクの高い見方となっている。

今回の主題である男性の「性的サディズム」傾向や女性の「性的マゾヒズム」傾向についても、これらである程度説明が可能と思われるが、そもそも「性的サディズム」「性的マゾヒズム」共に男性の方が圧倒的に多く、かつ「性的マゾヒズム」の方が三倍程度多いとされることの説明には不十分である。

## 「男性に多い」「サディズム」「マゾヒズム」と、「階層性」との関係

それに対する進化医学的説明の一仮説として、「ランク仮説」というものがある。

筆者も、かつてある医学誌にて、古今東西の人類社会を含めて、ニホンザルやチンパンジーなど多くの社会性を持つ生物種には、縄張り(テリトリー)を守る集団ごとに、ルール(法など)と、階層性(順位や役職等)がみられることを指摘したが、順位・ランク・階層性は、組織の構成員の適応(生存や繁殖)に重要な意味を持つ。

女性・雌にも順位はあるし、マウンティング行動等もみられるのだが、男性・雄集団内の方がその傾向が一般的に強い。最近では「パワハラ」等の社会意識の変化によって、所謂「体育会系」の気質は減ってきていると思われるが、現代でも軍や警察といった組織では厳然とした順位と、それに基づく支配・被支配(服従)の関係がみられ、そこにみられる心理に「性的サディズム」「性的マゾヒズム」の起源や適応的意義がみられるのではないかと考え方である。

パラフィリアの文脈では、あえて「性的」と区別しているし、無論性的場面に限ってみられることもあるのだが、一般の人間関係内においても「サディズム」「マゾヒズム」傾向がみられることは少なくない。

一般的に組織のリーダーは、相対的に支配的・サディズム的であり、部下は、相対的に服従的・マゾヒズム的である。多様な組織も皆「ヒラミッド型」であり、その逆は稀である(一人の社長と百人の部下という組織はあつても、百人の社長と一人の部下という組織はまずないだろう)。それが社会性を持つ霊長類の生得的な階層性によるものだからである。

リーダーより部下となる人数の方が多いし、生まれてきた個体が、将来リーダー格とはならない確率も高いので、「性的マゾヒズム」の方が三倍程度多いことの説明がつく。

また、部下はさらなる部下を持つことも多いので、「性的サディズム」と「性的マゾヒズム」の傾向を同時に有することや、両者が移行しやすいことの説明もつく。意識しているか、もしくはそれに納得しているかは別として、当初マゾヒスティックだった体育会系部活の一年生が、上級の三年生になる頃にはすっかりサディスティックになるといふのはよくみられる光景である(多かれ少なかれそうした役割を演じさせられているという面もある)。

いわゆる師匠と弟子の関係においても、性的なものがあるかどうか、意識的か無意識的かはそれぞれだとしても、そうした傾向が見て取れる場合がある。

中篇の同性愛のところでも触れたが、中世の武家社会等に

おいては明らかに性的な意味合いを帯びた上下関係が、普遍的、もしくは文化的でさえあった。

さらに言えば、現代においても、所謂「BL」といったサブカルチャーにおける男性のホモセクシャルを描いた創作物にもそうしたモチーフは多用されており、心理的に理解しやすいものがあるものと思われる。

また、これにより「性的サディズム」「性的マゾヒズム」共に男性の方が多いことの説明が可能になるが、そもそもパラフィリア全般に男性が多い理由を次に考える。

### 「なぜパラフィリア全般に男性が多いのか」

なぜ、パラフィリア全般に男性が多いのかについては、科学的な視点も含めて、様々な視点から考察されているが、ここでは、主に進化生物学的視点から考える。

ヒトや哺乳類等の男女・雌雄の繁殖においては、男性・雄側は、陰茎の勃起という性的興奮が不可欠であり、無論女性においても性的興奮は大事ではあるものの、男性・雄に比べれば性的興奮閾値が高くても繁殖上必ずしも不利ではない。

逆に言えば、男性・雄はそれくらい性的興奮閾値が低くないと、実際の性交や繁殖上不利になる淘汰圧がかかってくるということである。

良し悪しは別として、進化学的に、女性・雌をめぐる男性・雄の戦いは熾烈であり、常に男性・雄側の方が性交・繁殖にありつけない個体が多かった(一夫多妻的に、一部の「強い」男性・雄に多くの女性・雌が番つてきた)進化的歴史が、男性・雄を生得的により性的に興奮しやすくさせ、また、古今東西において普遍的に、パラフィリアにも、強姦等の性犯罪にも男性が多い理由と考えられる。

先にも触れた強姦的性行動についても、無論是とするわけでは決していないが、行動生態学的に考えて、少なくとも過去の集団強姦的性行動から、現在までの一夫一妻的性行動への変化の流れの中において、強姦的行動を取らなければ子孫を遺せなかった男性・雄は常に一定数いたはずである。

そして、集団遺伝学的に、過去の女性・雌に対する強姦的性行動によって子孫に伝わった遺伝子が、国や男女を問わず、現在を生きるすべての人類の遺伝子に受け継がれていることは間違いなく、ある意味、進化的に「強姦者」がいたからこそ今の我々が存在しているというのも一つの事実なのである。

### 「なぜ「裸」が「猥褻」なのか」

紙面の都合上、多様な個々のパラフィリアについて、進化的生物学的視点から全てを考察することはできないが、ここでは、「窃視障害」「露出障害」や、近年の事件報道等でよく目にする「盗撮」等の犯罪にも関連する「裸」の問題について考えてい。

人はいつから自然な「裸」を「猥褻」だと考えるようになったのだろうか。

本来「自然」な状態である裸を「不自然」とし、「猥褻」とする考え方は、生得的なものではなく、完全に後天的なものであり、文化的・宗教的なものである。

古代ギリシャのオリンピックが全裸で行われていたことはあまりに有名であるし、古今東西の文化人類学的な調査において全裸の部族は少なくない。

旧約聖書の創世記には、アダムとイブが、神の禁じた善悪を知る禁断の果実を食べ、お互い裸であることが恥ずかしくなり、果実で満たされた「自然」の楽園を追放される逸話(所謂失楽園の物語)が出てくる。

「全裸」を「神聖」なものとみなす文化は、古今東西にみられるし、十六世紀のキリスト教下の欧州においても、売春婦等だけでなく一般女性が乳房を出すことが文化的に流行したことがある。また、国によっては、貴族のみが乳房を晒すことが許され、下女には許されないと文化や、その様子を描写した絵画などもみられる。

日本でも江戸時代まで男女の混浴は一般的にみられており、現代人が思っている以上に、「裸」が「猥褻」とされたのは比較的最近のことかもしれない。

例えば、女兒の裸などは、少なくとも二〜三十年前には、むしろ成人の裸よりもメディアで流れていたし、一部のマニア向けの少女の裸体を集めた多様な写真誌も、町の一般書店で普通に売られていた。それらが、現在では「児童ポルノ」とされ、その売買はもろろん単純所持も禁止されている。こうした様々な法規制、発禁規制により、定義上「猥褻」とはいえない少女の裸さえ、メディアから姿を消した。

個人の生きていく数十年の間でさえこうした変化が起こるのであるから、「裸」への価値観が数百年単位で大きく変化したことも驚くことではないかもしれない。

元々主として防寒のためであった衣服がやがて常に身に着けるものとなり、古今東西の大部分の社会で、社会的階層を示すアイコン等としても用いられ、やがてファッションにもなった。日本でも身分によつて身に纏える色や服などが決まっていた時代があったし、今でもドレスコード等は存在する。シャワーや入浴時などプライベートでは日常的に裸になるが、「外」では衣服を身に着けつけないことは、現代では法的なルールである。

る。

ただ、以前のコラムでも触れたが、上半身の「裸」に対しては男女で扱いが異なる。相対的に個体差は少ないものの、男性にも性器としての乳頭・乳房はあるのだから、そのことに「科学的根拠はない。よって、個々の価値観や羞恥心に対する文化の影響がいかに大きいかはわかる。

いずれにせよ、「裸」自体は、本来「猥褻」なものではなく、かといって「神聖」なものでもなく、あくまで「自然」なものであろう。

### 「マスクの常態化と、口唇への羞恥心」

昨今のコロナ禍で、「外（公共）」でのマスク着用がほぼ必須となつているが、法的にも既にルール化された国や地域もある。また、本来の細菌やウイルス飛散防止等のためだったものが、短期間にファッション化されつつあり、着衣の歴史を彷彿とさせる。

裸体、性交、コンプレックスなど日常的に隠しているもの、隠したいものを晒すことに羞恥心が芽生えると考ええると、マスク着用が長期化・常態化すれば、マスクを外し、口唇を晒すことに羞恥が生じるようになる。さらに時が経てば、口唇を晒すことも猥褻とされるかもしれないし、撮影を禁じられるようになるかもしれない。

もし、口唇を晒すことや、口唇を盗撮することで逮捕されることになったら、現時点では大部分の人が失笑するだろうが、かつての人類や全裸の狩猟採集民からすれば、まさに大部分現代社会の裸に対する猥褻性や犯罪性は、失笑に値するものだと思う。

### 「現代人の顔に偏った視覚情報による不自然な性淘汰圧」

厳格なイスラム社会では、女性は外出時に行動に必要な目以外は全て隠す。そうした文化では、顔全体をさらすことに羞恥を感じるだろうし、また男性からすれば、顔全体により性的な興奮を生じるだろう。ただ、異性の好みを判断する要素がかなり限られるため、良し悪しは別として、露わとなっている目やその周辺だけに注目が偏り、男女として結ばれた後に、目以外の顔全体の外見は想像と違ったということも起こり得よう。

実は、それと同様のことが身体に衣服を纏った大部分の現代人にも言える。乳房と陰茎の性淘汰圧については次の項目で詳しく述べるが、例えば、男性であれば、女性の乳房の大

きさのみならず多様性のある乳頭や乳輪の色や形にも、好みの多様性があるかもしれないし、女性であれば男性の陰茎の大きさのみならず、運動能力の元となる身体全体の肉付きなども選別の対象となるかもしれない。しかし、現代の異性選別時には、少なくとも当初は衣服でそれらがほぼ隠されている分、イスラム女性の「目」のように、男女ともに「顔」という偏った身体情報に縛られることになるのであり、良し悪しは別として、進化史上の自然状態とは異なる性淘汰圧がかかっているものと思われる。

### 「他の類人猿に比べて相対的に巨大なヒトの乳房と陰茎」

裸であったことの「自然性」や、裸を隠すことの「不自然性」は、他の霊長類との性器の比較からもわかる。

前篇にて、類人猿間の精巣や性器の違いとその意味とに触れたが、もう一つ重要な視点がある。それは、他の類人猿全般との比較から、ヒトに特徴的な乳房と、陰茎の相対的な巨大化である。つまり、機能的にはある意味両者とも不必要に「大きい」のだが、そこには進化的な歴史がある。

約六六〇七百万年前にチンパンジーと分岐した後、かつての人類は四手歩行から二足歩行となった。それにより女性の乳房、男性の陰茎が前面に晒され目立つようになった。そして、その後異性による、より大きな乳房、より大きな陰茎を好み好みしたことによる性淘汰圧がかかったことが、他の類人猿に類をみない大きな乳房、大きな陰茎を持つに至った進化的背景である。

乳房は、主に乳腺と脂肪によるが、機能的な乳腺のみでは、他の類人猿並みに貧乳だったはずである。無論世の中には「貧乳好き」もいて、それも多様な価値観の一つだと思われるが、性淘汰圧を見る限り、大きな乳房を好む男性の方が多かったというのであり、実際二次元の創作物等でも、不自然に「デフォルメ」された大きな乳房が描かれることが多い。

男性の陰茎においても同様のことが言え、さらに陰茎の場合、勃起時の大きさが、より相対的に大きい。（なお、それまであった陰茎骨も消失したのだが、一足歩行となつて急所となる陰茎を晒した場合、陰茎骨の存在が、性交上のメリット以上に闘争上の弱点となった可能性もある。）

よって、かつては異性に勃起した陰茎も晒していたと考えられるし、また大きく勃起した陰茎を多くの女性が好んだというところに他ならない。

### 「陰茎・乳房の大きさと露出障害との関連及び今後の淘汰圧の変化の可能性」

パラフィリアの「露出障害」において、陰茎を晒したがる男性（もしくは少数ながら乳房を晒したがる女性）は、普段隠しているからこそ露わにすることによる得られる羞恥心や、相手に羞恥心を持たせることに性的興奮を覚えるという動機が最も多いと思われるが、意識的・無意識的に己の陰茎や乳房の大きさを誇示したい（あるいはかつての「全裸社会」では誇示した方が繁殖上有利だった）という可能性も考えられ、実際にそうした願望の持ち主や、逮捕された人の陰茎や乳房が、平均より有意に大きいのかどうか研究の余地があるかもしれない。

いずれにせよ、現生人類種の大部分の時代において、性器を晒してきたのだが、それを下着や衣服で隠し、さらには現代では胸を大きく見せる下着を付けることや、豊胸手術などがみられる。顔に対する化粧や美容整形等もみられる。そうなれば、やがて機能優先で元通りの小ささに戻っていく（退化する）かもしれない。

現代文明社会においては、「性」に限らず、「大事な部分」を、「隠し」、「偽る」のが、政治・経済からメディア、市井の価値観に至るまでの文化に通底しているようにさえ思われる。

### 「おわりに」

今回で、前中後篇と三篇に渡った「ヒトの性行動」についての俯瞰的考察を一旦終える。その多くは現代人類社会のタブーにも触れるものだったと自覚しているが、「生存と繁殖」は、人類の進化と適応において極めて重要な事柄であるので、今後折に触れて考察したいと考えている。

また、今回のコラムにて進化学や人類学的視点から、「自己家畜化」した人類の性への過度な干渉・管理の功罪と、先進国の少子化問題、歪な年齢構成比による繁殖世代への悪影響等についても論じる予定であったが、限られた紙面の都合上、次回にコラムで予定している「進化的適応環境（EEA）」と現代文明社会環境のギャップについての考察のところでまとめて取り扱わせていただくこととしたい。

院長 高野 寛

## 新型コロナウイルス感染症対策の取組み

本庄児玉病院では、新型コロナウイルス感染症対策として以下の取組みを行っています。



### 従業員に対する取組み



- ・手指衛生の実施
- ・勤務時のマスクの着用
- ・医療処置や治療上必要な場合は、エプロン、ガウン、フェイスシールド等を使用
- ・よく手が触れる場所の定期的な清掃、消毒を強化
- ・職員の健康管理(毎日朝、昼2回の検温、発熱等の症状により自宅待機の指示を行うよう取り決めております。)
- ・常時換気の徹底
- ・休憩スペースは常に換気を徹底し、座席の数を減らし間隔を空けるように配置することで、密閉・密集・密接を防止しております。



[休憩スペース]



### 患者さまやご家族に対する取組み



- ・面会禁止の実施
- ・来院時の検温・体調確認の実施
- ・受付にアクリル板の設置
- ・入り口玄関、受付、エレベーター入り口にアルコール消毒の設置
- ・ドアノブ、診察室の扉、エレベーター内のボタン、化粧室の扉等、患者さんの触れる機会が多い箇所のアルコール消毒を定期的実施しております。
- ・ソーシャルディスタンスの確保として待合室の椅子に間隔を空けてご着席頂くようお願いしております。

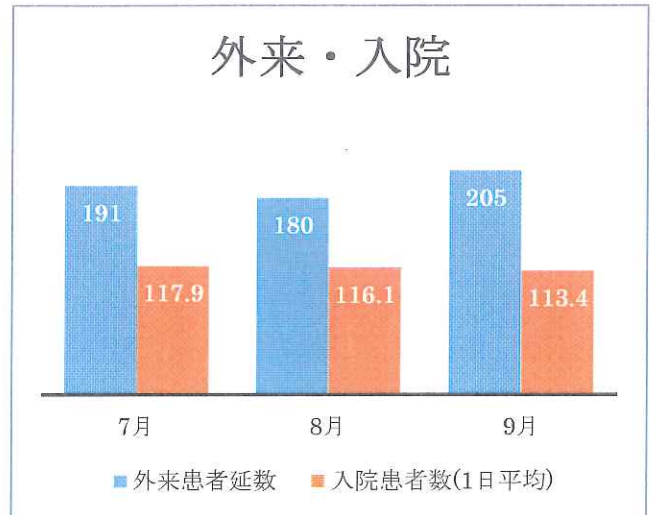


[受付]



—— 外来診療担当医 ——

	月	火	水	木	金
午 前	高野	高野	齋藤	新谷	新谷
午 後	齋藤	高野	齋藤	新谷	新谷



## 栄養課



9月は敬老の日メニューでお祝いをしました。「敬老の日」とはお年寄りを敬い、長寿を祝う日です。

## 9月の行事食「敬老の日メニュー」

今回はあまり馴染みのない食用菊を使用しました。

食用菊はお刺身のつまとして添えられることが多く、食べずに捨ててしまう方が多いのではないのでしょうか。しかし食用菊には体内の解毒物質の生産を高めることが発見されています。またビタミンやミネラルが含まれているため、酢の物や和え物に花びらを散らしたりして食べてみてはいかがでしょうか。



### 『敬老の日メニュー』

- 赤飯
- さんまの塩焼き
- 筑前煮
- 青菜と菊の和え物
- すまし汁



## 理念

患者さまの権利と尊厳を尊重し、笑顔と愛の心で  
全人医療へ奉仕します

## 基本方針

- 1・私達は、地域に密着した精神科医療の提供と的確な認知症のケアを実践します。
- 2・私達は、患者さまの意思と人権を尊重し、心の通った、愛の心で医療を提供します。
- 3・私達は、患者さま並びにご家族の信頼を得、満足度の向上に努めます。
- 4・常に医療技術の研鑽と知識の習得に努め、安全で良質な医療を提供します。
- 5・私達は、理念達成のため、健全経営の維持向上に励みます。

## 患者さまの権利

当院では、患者さまと信頼関係で結ばれた「患者さま中心の医療」を行うことを目指しています。ここに「患者さまの権利と責任」を掲げ、これを尊重します。

- ・安全で適切な医療を公平に受ける権利があります。
  - ・人権とプライバシーに配慮される権利を有します。
  - ・診療内容につき、十分な理解をするための説明を受ける権利があります。
  - ・検査、治療、その他医療行為に同意し、選択あるいは拒否する事ができます。
  - ・拒否した場合においても不利益を生ずることなく、同様な治療を受けることができます。
  - ・診療情報を知る権利があります。
  - ・自身の診療について、他の医師等の意見を聞く（セカンドオピニオン）権利があります。
  - ・精神保健福祉法等の法律に基づいた適切な手続きが保障される権利があります。
- 患者さまは、以上の権利のもと、治療上のルールを守り、医療を受ける権利があります。

### 一診療科目一

精神科 平日 AM 9:00~12:00  
PM 2:00~5:00

TEL 0495-73-1611

FAX 0495-73-1616

休診日 土曜日午後・日曜日・祝日・祭日  
(土曜日午前)

入院随時 各種保険取扱い  
完全予約制となっております。

### 一診療時間一



## 編集後記

すっかり朝晩は肌寒くなってきました。一日の中でも寒暖差があり体調を崩しやすい季節です。冬に新型コロナウイルスとインフルエンザの同時流行が懸念されていて、秋以降一層の警戒が必要になりそうです。皆様も体調管理には気を付けて下さいね。



## ストリートビューQRコード



施設周辺の道路沿いの風景を  
パノラマ写真でご覧いただけます。  
こちらのQRコードを読み取って  
ご利用ください。

院内の雰囲気もお楽しみ  
いただけます！



## 編集発行

2020年10月

医療法人(社団)明雄会 本庄児玉病院

広報誌グループ

〒367-021・2 埼玉県本庄市児玉町児玉 720

Tel. 0495-73-1611 fax. 0495-73-1616